

論文の内容の要旨

氏名：本 山 友 衣

博士の専攻の分野の名称：博士（心理学）

論文題名：パブリックアートが景観評価に与える影響に関する環境心理学的研究

本学位請求論文は、パブリックアートが景観評価に与える影響とそのメカニズムについて環境心理学の立場から検討したものである。

第Ⅰ部は序論であり、第1章では環境評価に関する先行研究を概観し、次いで、環境評価に影響を与える要素として本論文で注目したパブリックアートについて説明をした。環境評価の先行研究の中では、まず評価の基本次元について紹介した。環境評価の基本次元とは、環境に対する感情的な主観的反応の中に存在する個人差を超えた共通する部分を反映するものであり、本論文では、特に Russellら (Russell, Ward, & Pratt, 1981) の提案する「快」と「覚醒」の次元を重視する。この2次元は多くの実証的研究の中で有効性が支持されているものである。次いで、快と覚醒の関係性について提唱されているモデルとして、Berlyne (1971) の「対比の特性と覚醒」モデルを紹介した。不調和や複雑性に代表される対比の特性とは、知覚者にその環境の中にある視覚的要素に注意を払わせ比較を促す性質であり、例えば不調和は、通常は対になり得ないような要素が組み合わせることで、視覚刺激内がまとまらず、一つの存在として認識されない程度を意味する。このような対比の特性は、知覚している個人の覚醒を促す。そして覚醒は快と関係しており、喚起された覚醒が中程度の時に最も高い快をもたらす。覚醒が低すぎても、高すぎても快は低下する。つまり、快と覚醒は逆U字型の関数関係にあると見なされる。

都市における個人の経験において、都市のイメージや眺めの美しさの重要性は高い。都市を美しく見せる手法の一つに、屋外彫刻の「パブリックアート」がある。パブリックアートは、欧米諸国を中心に公共の文化政策として広く採用され、その文化的・経済的価値が認められているにもかかわらず、パブリックアートの心理効果に関する実証的な知見は乏しい。そのような現状をふまえて、第2章では本論文の意義と目的を論じた。本論文の目的は、上述の Russellら (1981) と Berlyne (1971) の提唱する環境に対する感情的評価の2次元モデルに基づいて、パブリックアートが景観評価に与える影響とその心理的な過程について明らかにすることであった。実験室において刺激を系統的に操作した実験を行うことで、環境への心理的反応に関する基礎的研究として学術的な知見を求めることに加え、現実の環境における利用者調査を行い、実務的応用可能性の検討も行うこととした。

第Ⅱ部では実験的検討として、各研究の目的に即して背景とパブリックアートの特性を実験者が操作した画像を刺激として評価課題を実施した、5つの研究について報告した。まず第3章では予備的検討として、パブリックアートが自然および都市景観の評価に与える影響を検討した (研究1)。自然／都市景観にパブリックアートがある条件とない条件で評価を比較した結果、先行研究で示されてきた自然景観に対する肯定的評価が確認された。また、自然景観に比べて評価が低いことが示された都市景観において、パブリックアートが快および覚醒評価を上げる可能性が示唆された。よって以降の研究では、パブリックアートによる都市景観の改善に関して詳細に検討することとした。

第4章では、東京23区とその近郊に実際に設置されている複数のパブリックアートを含む都市景観画像を対象として実験を行った (研究2)。パブリックアートのある条件とない条件の都市景観画像に対する評価の比較から、パブリックアートは景観の覚醒の次元に常に肯定的に影響するが、快の次元については、パブリックアートの性質の違いが効果の方向性を規定する可能性が示された。しかし、研究2では背景となる都市景観とパブリックアートの組み合わせが固定されていたことから、両者の適合が影響する可能性についての数量的な検討ができないために、組み合わせによる適合の効果を検討する実験の必要性が示唆された。

そこで第5章では、複数のパブリックアートと複数の背景のすべての組み合わせを刺激として用いることで、パブリックアートと背景の組み合わせの効果の数量的検討を行った (研究3)。研究3においては、快・覚醒評価を従属変数、背景とパブリックアートを独立変数とした分散分析を行ったが、効果量の比較から背景とパブリックアートとの組み合わせの影響に比べて、パブリックアート自体の評価が、景観全体の評価に与える影響が大きいことが明らかにされた。

第6章では、研究3に引き続き背景とパブリックアートの組み合わせを検討した(研究4)。研究2および研究3で扱った、背景となる都市景観は覚醒の程度がすでに高めであったため、パブリックアートが覚醒の変化を通じて、景観全体の印象に影響する余地が小さかった可能性があった。そこで研究4では、覚醒が低程度から中程度である、都市部の商業利用の再開発地区以外のより一般的な都市景観を対象とした。そのような背景に、快が高い/低いパブリックアートがある条件を設定し評価を比較したところ、パブリックアート自体の快評価の高低にかかわらずパブリックアートは景観の覚醒を上げることが確認された。快については、快の低いパブリックアートは景観全体の快を下げ、快の高いパブリックアートは景観全体の快評価を上げることが示された。したがって、覚醒の程度が低い都市景観の改善におけるパブリックアートの有効性が示唆されたといえる。

研究3および研究4では、複数のパブリックアートと複数の背景のすべての組み合わせに対する快・覚醒評価を従属変数、パブリックアートと背景を独立変数とした分散分析を行った際、背景とパブリックアートの交互作用が、パブリックアートの主効果と比較して相対的に小さいという結果が得られた。他方で、背景とパブリックアートの適合の程度を直接尋ねた場合、認知された適合と快の間には強い相関が見られたことから、適合評価と、背景とパブリックアートの交互作用が同一の変数を測っているとは考えにくかった。そこで第7章では、快と適合の関係性を明らかにすることを目的として、研究3で得られたデータの再分析を行った(研究5)。結果、研究3においては、快評価が極端に低いパブリックアートの影響でパブリックアートの主効果が相対的に大きく表れたものの、背景とパブリックアートの適合も、景観評価に一定程度の影響を与える要因であると解釈された。

第Ⅲ部では、応用的検討として実施した実験および調査について報告した。研究3から研究5では、都市景観とパブリックアートを実験者があらかじめ組み合わせた刺激を用いていたが、第8章では、実験参加者自身が背景とパブリックアートを組み合わせる課題を実施することにより、これまで示されてきた背景とパブリックアートとの適合の影響を確認するとともに、判断理由について質的に検討することを目的とした(研究6)。結果として、パブリックアート自体の覚醒だけでなく、背景とパブリックアートの不適合、すなわち対比の特性である不調和が適正水準を超える覚醒を促し、景観全体の快評価に影響することが改めて示された。したがって、パブリックアートの性質だけで景観全体の評価を予測することは難しく、適合の判断理由は景観全体の覚醒の程度を反映するものであったことから、質的検討を行った研究6においても適合の重要性が再び示されたといえる。

第9章では、大学のキャンパスを対象とし、実際に設置されているパブリックアートがキャンパス環境の評価に与える影響について検討した(研究7)。キャンパス利用者を対象としたWeb調査では、快および覚醒の評価が高いパブリックアートがキャンパス環境評価を改善した可能性が示唆された。研究7で扱ったパブリックアートについては、覚醒が高いほど快も高く評価されたが、これは喚起された覚醒が最適を超えて不快を感じさせる水準に達しなかったためであると解釈された。

第Ⅳ部では結論として、研究1から研究7で得られた結果を総括し(第10章)、第11章および第12章において本論文の研究的・実務的意義を論じた。第13章では、総合考察を行った。まず、全体として本論文では、パブリックアートが都市景観の感情的評価に肯定的に影響を与える可能性が示された。しかし、感情的評価でも快と覚醒への影響の形は異なっており、パブリックアートはその性質にかかわらず景観の覚醒を常に上げるが、快次元への影響の方向性はパブリックアートの性質と背景との適合によって左右されることが明らかになった。快次元への影響のメカニズムについては、対比の特性と覚醒モデルから解釈可能であり、すなわち、パブリックアートの性質あるいはパブリックアートと背景との適合によって景観全体の覚醒が中程度に引き上げられた場合に快評価は最も高くなるが、覚醒が適正水準を超えて上がりすぎた場合には快が低く評価されたことが示唆された。したがって、単調で変化に乏しい都市景観の覚醒を引き上げ、活気のある心地よい場所を都市の中に創る手段として、パブリックアートは有力な選択肢になり得るという実務的な利用可能性が示された。また本論文は、分散分析や相関分析を用いた量的アプローチと、KJ法的分析を用いた質的アプローチの両側面から、Berlyne(1971)の提唱する対比の特性と評価との関係性について検討しており、視覚刺激への心理的反応とそのメカニズムに関する基礎的研究として、環境心理学あるいは環境美学に貢献できる知見が得られたと考える。

今後の展望として、パブリックアートの機能や評定者との位置関係、関わり方などの変数を含んだ、より現実の建築や都市計画設計の実務に即した検討の必要性を論じ、本論文の結びとした。